

・
生は死より
ほんのわずか年上だ

P・ヴァレリー

二〇二〇年、二月七日、午前十時。

山内参三は、葉山の別荘にいる。

この別荘は、友人の作家東剣市から、超ベストセラーの自著、『死んだる団』

の印税の半分で購入したものだ。

むろん山内は、愛妻雪絵のためにかんがえたのだったが、山内と雪絵がこの別荘で暮らしたのは、半年間にも満たなかった。

それでも山内は、雪絵との思い出を糧に生きつづけ、この別荘で書きつづけ、現在九十歳。

還暦になったとき、山内は、雪絵との思い出に特化した、（私小説といってもいい）作品を書いた。

そして、後輩の（元私立探偵）舟木英介が社長をしている出版社から刊行したのだ。

この、

『雪絵抄』

が、やはり超ベストセラーとなり、山内はこの作品で、〈日本文学大賞〉と〈日本文芸大賞〉を同時受賞した。

その後は、山内はノンフィクション・ライターとは呼ばれずに、「作家」と呼ばれた。

そして現在は、十年前に他界した弁護士、新川次郎の伝記を書いている。

一昨年胃潰瘍を、昨年前立腺肥大を手術したが、（家政婦は三日に一度きてもらうものの）まだ介護ヘルパーは必要としていない。

そろそろ来客があるはずだ、と山内はおもむろに万年筆を置いて、応接間にはいった。

いつものジャージ上下をセーターとスラックスに着替え、禿頭にカツラをかぶせ、

入れ歯をはめた。

そして、舟木英介が送ってくれた玉露と、東剣市が送ってくれた羊羹を用意した。
チャイムが鳴ったので、山内は玄関まで出迎えた。

来客は、山風（旧姓花井）健太と、その兄の花井勇太で、すでに定年退職はしているが、刑事時代に鍛えた足腰は丈夫とみえ、天気がいいので山内の別荘まで三十分以上歩いてきたとのことだった。

そのせいか、吐く息は白かったが、顔の血色はすこぶるよかった。

スーツにコート姿で、手土産を用意していた。

兩人とも八十歳近いが、容姿は山内が見知っていたころと、それほど変わりがなかった。

開口一番、山内がそういうと、

「いやあ、もう半世紀経っていますよ」

と山風が白髪頭をかいた。

「山内先生こそ、麻布十番の時代と、まったく変わりませんね」

花井が皺だらけの笑顔でいうと、

「半世紀も経つと、お世辞もうまくなるもんだね」

と、山内も満更でもない顔をした。

九十歳にもなると、若いといわれるのがいちばん嬉しい。

さっそく山内は応接間に招き入れて、ソファに座ってもらおうと、もてなしの準備をした。

「それにしても、あのころはしつこくて、申しわけなかったねえ」

花井に対しては、当時留置されていた雪絵の件で、しつこかった。

山風に対しては、

【D】

すなわち、

【自殺請負所】

のことを、こまかく、しつこくきいた。

麻暮正作と荒野大三郎の死闘に関しては、じっさいのふたりの動きを演じさせました。

「いえいえ、あのしつこさを、刑事として見習わせてもらいました」

花井がまた笑顔でいった。

花井の笑顔を見たのは初めてだ、と山内は気づいた。

山内は玉露と羊羹を、ふたりの前にだした。

「もうすこしはやく訪ねてくれれば、拙著、

『死んだる団』

の印税の一部をさしあげたんですがねえ」

という、山内のセリフは嘘ではなかった。

当時はほんとうにそうかんがえていたのだが、妻雪絵の看病と、その後の葬式に謀殺されて、失念してしまったのだ。

「その、

【死んだる団】

のことなんですがね」

と山風がいだした。

「あらら、贈呈もしていなかったか、それは失礼」

「もちろん、いただきましたし、読ませてもらいましたが、じつは本の話ではなく、現実問題として」

「お言葉を返すようだが、本の話と現実問題は、おれのなかでは、一緒なんだ。

おぞましき、

【自殺請負所】

は、麻暮の手下の小林金助が仕掛けた、

【D爆弾】

で破壊され、川上所長も荒野も麻暮に殺された。

すなわち黒幕の死によって、

【死んだる団】

も壊滅したわけだ。

それは、おれよりも山風さんのほうが詳しいが」

「お言葉を返すようですが、じつは本の話と現実問題が一緒なのは、半世紀前のことで、ひとことでいうと、

【死んだる団】

が、復活したようなんです」

「いやあ、意味がわからないなあ。

荒野がこの世にいないのに、

【死んだる団】

が復活するもんなのかねえ」

「山内さんは、ネットをご覧になりますか」

「いやあ、いまも手書きだから、パソコンは置いていない」

「去年の暮れあたりから、ネットでは、

【死んだる団】

とか

【自殺請負所】

というコトバが、氾濫しているんです」

山風はスマホをとりだして、山内にその内容を見せるつもりだったが、老眼鏡をかけても小さい文字は見にくい山内は、やんわりと拒んだ。

「おれの本が、いまでも読まれているとはかんがえにくいし、万が一荒野が生きていたにしても、百歳をらくに越えているはずだからなあ」

「僕もそのことをかんがえて、復活という言い方は慎もうかなと。

それでもひとつ、今更ながら気になることがあるんです。

これは山内さんにはお話していません、というのは当時は取るに足らぬことだと

おもっていたものですから。

川上宙衛門の最後のコトバのなかに、

【D】

は半世紀後にはかならず復活する云々とあったのです」

山風の声は暗かった。

半世紀前の、苛酷な事件の渦中にいた自分を、否応なく思いだしたのだった。

「たしかにそれは、突拍子もないコトバでね、おれの本にいれなくてよかった。

しかし、復活の仕方はさておいて、復活するという予言は、当たったことは当たったんだな」

「それが、ネットを、兄貴と一緒に、こまかくしらべてみるとですね」

「元刑事の習慣は、なおらないもんだね」

山内は皮肉ではなく、誉めたつもりだった。

「どうにも、荒野大三郎の影が見えてしかたがないんですよ」

山風のセリフに、花井も相槌をうった。

「元刑事がふたりそろって、そういうんだから、無視もできんな。

とにかく、そういうことだとして、なにか手だてはかんがえているのかい。

荒野の息がかかった人間が、暗躍している可能性があるからね」

「麻暮正作さんは、いまどうしているのでしょうか」

山風の唐突な質問に、山内はしばし言葉を喪った。

半世紀前の今日、麻暮は七里ヶ浜の海岸に流れ着いているのを、地元の住民に見された。

なんとか命はとりとめたが、顔面の崩れがひどく、情報がはいつて駆けつけた山内は、もしかすると、こちらが荒野で、麻暮は海底ではないかとおもったこともあった。

麻暮は整形手術を拒否し、のちに崩れた顔に鉄仮面をつけたので、山内はよけいに疑心暗鬼になったものだ。

けれども、喋れるようになってからは、麻暮だと確信し、麻暮の保養のためにと、
自著、

『死んだる団』

の印税を一部前借りして、大金をわたした。

麻暮の殺人は証拠不十分だし、当時花井健太がさかんに「正当防衛」を主張したので、罪に問われることはなかった。

のちに麻暮は、山内がわたした金で、鎌倉の小町通りの一角にひっそりと棲み、来客も拒んできたので、山内でさえ、すくなくとも四十五年は会っていない。

噂では、百歳を越えて、車椅子状態だが意気軒昂、七十歳を越えた手下の金助が、身の回りの世話をしつづけているとのこと。

「あの鉄仮面に、いまさらなにを頼もうというのかね」

ようやく口をひらいた山内は、いささか怒っているふうだった。

「いえいえ、荒野のことだったら、麻暮さんにおききするのがいちばんとおもいま

して。

とにかくこのままでは、兄貴も僕も、いずれ死の床で、後悔するにきまっています」

山風は弁解気味に答えた。

「鉄仮面はすでに認知症だよ」

山内は嘘をいった。

日々の居眠りが快樂のはずの人間を、たたきおこすことはないというおもいだった。

「現代の警察は、半世紀前とはちがいます、なにか事が起こってからでない動きませんから。

それをつい弟も、麻暮さんの名前をだしてしまったのです」

花井は山風の代わりに頭を下げた。

「むかしの警察も同じだったよ。

けれども、ご両人や、寒崎武士警部や山風順一刑事みたいなサムライもいた。

どうかね、いまでもサムライがいるなら、後輩のそういう刑事に相談してみたら」

山内の提案に、花井も山風も、暗い苦笑をした。

「残念ながら、そういうやつはおりません。

それに、半世紀前の事件をしっているやつもおりません。

十年一昔、といいいますが、五十年五昔、ですものねえ」

静かにしみじみと話す花井のコトバを、噛み締める表情できいていた山内に、つと、この両人の訪問を無駄にさせたくはない、という気持が湧きおこった。

「おれも、正作さんも、棺桶に片足つつこんでいるが、舟木英介だったら、ご両人と同世代だ。

せっかく探偵から足を洗った舟木だから、探偵に相談する、というのではなく、出版ジャーナリストの立場からの意見をもらう、できれば情報も集めてもらおうというのはどうだろう。

さっそくおれから電話をしておくよ。

舟木の家は鵜沼だし、いまは会長だからそう多忙でもあるまい、都合があれば今日にでも」

花井と山風の愁眉がひらいた。

七日、正午。

麻暮正作と小林金助は、鎌倉小町通りの茅屋で、かるい昼食をとっている。

いつからか、ふたりは朝と晩は食べなくなった。

毎日の昼食は、金助が用意しているが、麻暮は食のことには無関心なので、苦労したことはない。

麻暮は、目と鼻と口だけが見える渋色の鉄仮面を、食事中でもはずさない。

いま玉子と葱を入れた粥をすすっているが、粥が鉄仮面を汚すと、金助がタオルでふきとってあげている。

それでも、車椅子の麻暮のほうが、付き添う金助よりも元気そうにおもえると、近所の者はいう。

「ところで、金ちゃんよん」

と、麻暮はいつもどおりの口調で話しかける。

「へえ、だんな、今日はなにを話題にしようかね」

「金ちゃんの弟は、いまどうしてるの」

「いやだねえ、だんな、この話は今週三回目だ。

弟の勘助だったら、もう四十年以上前に成仏している。

慕っていた山風順一刑事が亡くなってから、急に元気がなくなって、バイク事故を起こしちゃった。

山風さんは、山形時代にしりあった、永山一郎という作家の話を、勘助によくしていたらしい。

その永山先生と、同じ死に方だあ。

勘助は、永山先生の死を、事故でなくて、自殺だとおもっていたらしいから、勘助は、自殺だったのかもなあ」

「そうか、そうだった、おもいだしたよん。

勘ちゃんは、金ちゃんよりも、ずっと生命力があったが、人間はわからんもんだねん」

「あちきだって、だんなが、もしあのとき死んでいたら、とっくにこの世にはいないだろうよ」

「あのときは、金ちゃんも大活躍だったねん、ケケケ」

この笑いがでたときは、麻暮の機嫌がよいときだ、と知っている金助は、入れ歯がとびそうになるくらい、一緒に声をあげて笑った。

麻暮は探偵稼業から足を洗っていないから、いまでも金助の仕事はある。

とはいえ、依頼人は一年で三、四人くらいのもものだから、歳はとってもそう負担ではない。

「ところで、金ちゃんよん」

「へえ、だんな、こんどはどんな話題で」

「どうしてボクがここに棲んでいるか、わかるかい」

「なんですかいまさら、安かったからでしょ」

「荒野大三郎だよん、やつがまたなにかしでかすとしたら、きっと湘南だからさ」

「だって、荒野はもう死んでるでしょ、万一生きていたとしても、百十歳くらいなんじゃ」

「ボクにはどうもひっかるのよん、川上宙衛門の最期のコトバがね」

「半世紀後に復活するというやつですか、あれは希望的観測というやつでしょ」

「川上は科学者だよん、なにか根拠があったにちがいないと、ボクは推理しているのさ」

「それで、だんなは、半世紀、ここで待っていたというわけですか」

「その半世紀後がきたんだ、ボクはそのために、認知症にもならず、生きてきたんだ、ケケケ」

「あちきには、だんなの、その執念がわからねえ、認知症になったほうが幸せでっせ」

麻暮も金助も食べ終えて、いつもならこれから二時間昼寝タイムなのだが、今日ばかりはそういきそうもなかった。

「どうにも胸騒ぎがしてしかたないのよ、心臓病でも肺炎でもなさそうなんだがねん」

「だんながそこまでいうんなら、あちきがちょっくら地元取材してこよう。

鎌倉も江ノ島も、あちきの庭みたいなものさ、だからあちきにとっては、狭い世界でっせ」

「すまんなあ、金ちゃん、ヨボヨボなのに、ケケケ」

「だんなは、憎まれ口ばかりきいているから、元気なんだ。

憎まれっ子、世にはばかる、って行ってさ」

「じゃあ、頼むよん、ボクは、はばかりにいきたくなった」

麻暮は自分で、車椅子を操ってトイレにむかい、金助はそのままの恰好で外出した。

七日、午後三時。

花井勇太と山風健太の兄弟は、鵜沼の舟木英介邸の応接間にいる。

藤沢駅前ランチをとってから、江ノ電で鵜沼にきたのだ。

江ノ電のなかで山風は、探偵麻暮正作のことを思い出していた。

あの男なら百歳どころか、二百歳まで生きても不思議はないとおもわれた。

それから、〈日刊スクープ〉の小金井豊記者のことも思い出した。

小金井は、長く名古屋支局の支局長をつとめていたが、還暦も定年も待たずに、脳梗塞で亡くなっていた。

もし小金井が生きていたなら、（山内でも麻暮でも舟木でもなく）まず小金井を訪ねたかもしれないと、山風はかんがえたりもした。

花井勇太も山風健太も、舟木英介とは初対面だが、舟木のことは山内参三や山風順一からよくきいていた。

そのきいていた印象と、まったく同じなことに、ふたりはいささかおどろいた。

名刺交換をしたのち、花井と山風は舟木に、広々とした応接間に通されたのだ。

（すっかり上品な老婦人になっている）舟木の妻の真希が、紅茶と手作りのクッキーをだしてひきさがると、舟木のほうから切りだした。

「要するに、花井さんも山風さんも、荒野大三郎氏が、まだ生きてると、おかんがえなのでしょいか」

どうして舟木は、荒野に「氏」をつけるのだらうと訝りながらも、山風は説明をはじめめる。

「兄も僕も、そう確信しているわけではありません。

万一、荒野が生きていたとしたなら、たいへんな高齢ですから。

ただ、ネットの情報を検証してみますと、荒野の後継者が、暗躍しているとしかおもわれません。

それが模倣犯なのか、二番煎じなのか、いずれにしても荒野の恐るべき思想が生きています。

息子の荒野大海は、若くして入水自殺をしていますし、門下筆頭の川上宙衛門は、まちがいなく麻暮さんに殺されたのを、僕はこの眼で見えています。

それなら、その後継者は、いったい何者なのか。

舟木さんもよくごぞんじの、

『暗殺論』

の朝山完吉先生のご息子の善吉さんは、長く仏の道で精進され、数年前に他界されたときいています。

となると、他に心当たりがありません。

舟木さんは、荒野が亡くなる当日、荒野、つまり松本玄信と、親しく話をなされたときいています。

それで、舟木さんの見解をおききしたいのです」

「そうですか」

とって、舟木は腕を組んだ。

「どんなご意見でもけっこうです」

こんどは花井がいて、身を乗りだした。

「わかりました、が、参考になるか、どうか。

じつは、ぼくは、荒野氏が、まだ、生きてると、かんがえているのです」

この舟木の意外な言葉に、花井と山風は顔を見あわせて、しばし啞然とした。

「しかし、常識でかんがえて、いくらなんでも」

ようやくいった花井の言葉を受けて、

「その常識が通用しないのが、荒野氏です。

ぼくはあの当時、ベントのなかで、たしかに荒野氏からいろいろきいたものです。

それは、告白といってもいいもので、なかでも、荒野氏の、死に対する極度の恐怖心と、永遠の生への烈しい欲求をかんじとったものです。

ともかく、荒野氏に、常識は通用しません。

松本玄信、北山極斎、日下典禪と、この大物たちはすべて、荒野氏が演じていたキャラクターだったなんて、普通だれが信じるというのですか。

ぼくはギリシャ悲劇を連想しますが、あれも、現実社会ではありません。

常識が通用しない荒野氏が、万が一生きていたとしても、ぼくには不思議でもなんでもないでしょう」

「もし仮にそうだとすると、荒野の、

【D】

はどこにあるのでしょうか。

【秘龍窟】

は、もうあのころとはちがって、ただの洞窟にすぎません」

山風は、当時を想いおこしながらいった。

「【秘龍窟】

は、場所、というだけにすぎません。

つまり、荒野氏の在るところが、

【D】

なのだとおもわれます」

舟木は確信的な口ぶりであった。

「それはやっかいですね」

花井は溜息まじりにいった。

「やっかいです、麻暮さん流に、

【D】

を発見することは、可能だとおもわれます。

つまり、

【死んだる団】

のメンバーから、

【D】

の在処を探る、というやりかたです」

「しかし、いまのところ、ネットですから、そのメンバーが特定できません」

「いやはや、はやく探偵をやめてよかったです。

こういう社会では、パソコンに堪能でないと、探偵も刑事も、つとまりそうにありませんね。

そうそう、コンピュータの専門家に、協力をあおいだらいかがでしょう」

舟木は苦笑していた。

花井も苦笑して、

「ところが、いくら専門家に頼んでも、頼むこちらがコンピュータ音痴なら、無駄なようです」

「そういうものですか、余計にやっかいですね」

「なにか他に、手だてはないものでしょうか」

山風が困惑の表情できくと、舟木はガラス戸のむこうにひろがる広大な庭をながめながら、

「そうですねえ、本音をいえば、ぼくは荒野氏が嫌いではない。

むろん、犯罪なのだが、ある見方によっては、必要悪的な犯罪の気もする。

ぼく個人にとっては、荒野氏よりも麻暮さんのほうがおそろしい。

というより、荒野氏と麻暮さん、悪と悪が、怨と怨が、義と義が、ぶつかりあっている、その烈しい火花がおそろしい、残りの人生はすくなくいすから、無関心で

いたいほどです。

だが、真相をつきとめたい、おふたりのお気持ちにたいして、探偵だったぼくには、無関心ではられません。

とくに山風健太さんにとっては、あの事件に関連して、義理のお父さんが亡くなっているわけですから。

そこでひとつだけ、おそらくこれが唯一のヒントというか、ポイントでしょう」

花井と山風は、同時に身を乗りだした。

「唯一、ですか」

「じつは、ことしの正月に、松本玄信先生の秘書だった、木下弁太郎さんが、ひさしぶりに訪ねてくれました。

介護施設にいるという話をきいていたんですが、あのときはそんな雰囲気はまるでなかったですね。

その木下さんが、だいぶ酔ってしまって、たまたま同席したうちの社の者たちが、介抱したりしていたのですが、なにか気になることをつぶやいているんですね。

もちろん、気になるのはぼくだけであって、その他の人たちにとっては、酔っばらいのクダにすぎません。

たしか木下さんは、こういっていました。

『むかしにもどったんだ、半世紀ぶりにもどったんだ、私の仕事にもどったんだ、酔っばらわずにいられますようか、酔っばらってなどいられますようか』」

「半世紀ぶり、半世紀ぶり、たしかに木下さんは、そう口走ったのですね」

山風は大声をあげた。

「まちがいありません、高性能の補聴器をつけていた、ぼくの耳がおぼえています。

そして、後日談があります。

完全に酔っばらった、木下弁太郎さんを、うちの社員がふたり、タクシーで送っていったのですが、あとで社員がいうところによると、木下さんは、ある建物の前でタクシーをとめさせて、ふらふらしながらも、そこにはいつていったとのことです」

「ある建物とは」

山風が切羽詰まった声できくと、舟木は、いささか躊躇しながらも、

「鎌倉山の中腹に、昨年建ったばかりの、洋館です」

と、はっきりといった。

七日、午後四時半。

麻暮正作は、小林金助の報告をうけている。

「それで、金ちゃんは、鎌倉山のその洋館が、くさいとにらんだのかい」

「くさいのなんのって、クサヤよりくさい。

有島タケオ、イクマ、里見トンの三兄弟が、若い頃住んでいたという噂の洋館が、

昔そのあたりにあってさ。

その新しい洋館が、その噂の洋館に似てるってんで、有島三兄弟のファンが建てたんだろうって。

もしかすると、有島三兄弟の〈文学記念館〉かもしれないなんて。

それがさ、材木座にダチの古道具屋がいてさあ、やつの話では、去年のクリスマスに、あちきくらいの歳の、老紳士が、やってきたとのことさ。

檜とかさ、高額な古道具をたくさん買い占めて、それを運んだ先が、なんとその洋館っていうんだから、クサイ。

運び込んだ様子もきいたがさ、有島のアの字も文学のブの字もないっていうんだから、クサイ」

まだまだ喋りまくりそうな金助を、麻暮はいったん遮って、

「金ちゃん、その老紳士の名前をきいたか」

「しまった、ききのがしたあ」

「購入したんなら、伝票とかが残っているはずだよん。

いいや、それほど高額なら、銀行から振り込んでいるはず、だとしたら偽名は通用しないよん」

「でもさあ、それでも、荒野は偽名が得意だからなあ」

「その老紳士は、荒野ではない。

ボクが小町通りに棲んでいるのを、荒野がしっていないはずはないからねん。

材木座あたりに、呑気に出没なんぞ、できはしないよん、ケケケ」

「まあ一応とのこと、あちきが、ちょいと電話してみませ」

金助はケイタイをとりだして、すぐに古道具屋をよびだした。

「そうそう、その老紳士の名前だ、そうそう、いますぐ、でないと、あちきは、だんなに殺される。

なになに、きのした、べんたろう、ってか、偽名じゃねえだろうなあ」

「ケケケ、ケケケ」

金助が電話を切る前に、麻暮はけたたましく笑った。

「ケケケ、木下弁太郎か、松本玄信の秘書だった男よねん、ケケケ」

七日、午後五時半。

花井勇太と山風健太は、鎌倉山の例の洋館の、十メートルほど手前にいる。

鬱蒼とした木々に囲まれた、そそりたつ洋館には、庭もなく玄関もなく、ふたりにはそれが別世界に見えた。

「まるでガウディだなあ」

花井がいった。

「奥も深そうだね」

山風がいった。

どうしたものか相談をしていると、黄昏の林のなかから車椅子の麻暮正作と、それを押す小林金助が現れた。

山風は驚きながらも、鉄仮面の麻暮に丁重に挨拶をした。

「やあ、ひさしぶり、あのころはずいぶん世話になったねえ。

ここに辿りついたとは、さすがは元刑事だねん、ケケケ」

といって麻暮は、金助に耳打ちで指示をだした。

金助が無言でその場を去ったのを見届けてから、麻暮は山風に再び向き直った。

「金ちゃんが所用でねん、すまんが山さん、ボクの手椅子を押してくれないか」

「もちろんいいですが」

山風が戸惑っていると、

「お兄さんはここで、見張り役をよろしく。

ボクと山さんで、あの洋館に踏みこむからねん。

【秘龍窟】

を思い出すねえ、ケケケ」

麻暮の有無をいわせぬ指示に、山風は花井と目くばせをして、素直に従うことにした。

「麻暮さん、それではいきますが、玄関らしきものが見あたりません」

山風は車椅子を押しながらいった。

「いかにも荒野らしいが、玄関はなくとも出入り口はあるはずだよん」

山風は、いかにも麻暮らしい発想に、感心した。

(このひとは、百歳を越えても、不思議なくらい、半世紀前と変わってはいない)

洋館の前まで行くと、麻暮は地面を凝視した。

「この足跡は、ぐるりと裏に続いているねん。

出入り口は裏にあるはずだよん」

「また勝手に潜入するんですか。

ここは洞窟ではないから、住居侵入罪になりますよ」

立ちどまった山風が小声でいうと、麻暮はふりかえって、

「ここの主人は、もう防犯ビデオで、ボクらを、確認しているはずだよん。

ここの主人は、ボクの登場を心待ちにしているはずだよん」

「ということは、荒野、大三郎が、ここにいると、そういうんですか」

「他にだれがいるというのよん、ケケケ」

麻暮は山風に、車椅子を押すよう催促をした。

七日、午後五時四十五分。

山内参三と舟木英介は、電話で話をしている。

「そうか、舟木君、それで、おふたりはその洋館へいったのだね」

「ええ、ついさきほど、花井勇太さんから、ケイタイにメールがはりました。

麻暮正作さんも、その洋館にきて、鉢合わせになったとのことです」
「そうか、さすがは麻暮探偵だが、これはおおごとになりそうだね」

「【秘龍窟事件】

の再来ですかね。

正直、ぼくは、荒野大三郎氏を、嫌いではなかったのです」

「それは、わかっているつもりだよ。

ボディガードを二度もやれば、情が移ってもしかたがない」

「そういう意味と少々ちがってですね。

あのころは若かったけれども、この歳になって、自分の死期も計算できるようになりますとね、なんだか荒野氏の考えというか、気持が、わかってきたんです」

「だから、それを、情が移ったというのさ。

舟木君だから、あえていまさらいうとさ、おれが、

『死んだる団』

を書いたのは、荒野や、

【D】

を非難するためではない。

人間の、そう、人間というものの、哀れさを、書いたのだよ」

「あわれさ、ですか」

「人間はさ、だれでも、いつかは、かならず、死ぬ。

つまり、人間は、生まれたときから、血肉のなかに、哀れさを、もっているんだな。

それなのに、自ら死を選んだり、だれかを殺したりする。

だってさ、いくら自分が厭でも、相手が憎くとも、自分も相手も、数十年も経てば、みんな死んでしまうんだよ。

自分を殺さなくても、相手を殺さなくとも、いずれ、宇宙の摂理とやらが、みんな殺してくれるんだ。

その事実を認識できない、人間の哀れさ。

そして、永遠の命を願う、人間の哀れさ。

永遠でなくとも、一日でも長く生きたいと、健康第一に励む、人間の哀れさ。

たとえばさ、二十歳で死んだ者も、百歳で死んだ者も、何億光年の宇宙の歴史からみれば、ちがいはまったくないのさ。

そういう人間の哀れさ」

「そうですね、ぼくらは、だれでも、哀れな人間なのですね。

荒野氏と麻暮さんに、きかせたいものです」

舟木は深い溜息をついた。

「それがさ、あのふたりは、わかっちゃいるけどやめられない、という性分なのさ」

山内も深い溜息をついた。

七日、午後六時。

麻暮正作と山風健太は、洋館のなかにいる。

出入り口はすぐにみつかったが、ほとんど這っていくトンネルだったので、車椅子はたたんでいれなければならなかった。

山風はまさに、

【秘龍窟】

を思いださないわけにはいかなかった。

そして山風は、麻暮が共に命をかけた仲間であったことを、あらためて認識しないわけにはいかなかった。

「麻暮さん、麻暮さん、あの当時は、お互い、若かったんだなって、おもいますよね」

「そうだねえ、そうだねえ、あのときは、クサイおもいをさせてしまって、すまなかったが、いまはオナラもでない」

「一度あることは、二度ありますねえ、でも、三度目の正直は、ないかもしれせんね」

けれども、この出入り口の様子によって、山風は荒野大三郎の存在を信じる事ができた。

洋館は暗く、

【D】

同様に、奥が深かった。

麻暮の車椅子を押しながら、山風は一步一步すすんでいった。

すると、（山風にとっては）まったく突然、麻暮が大声をだす。

「おうい、荒野大三郎、ボクだ、麻暮だよん、どこにいるんだい、荒野」

すると、（山風にとっては）まったく意に反して、奥の奥から、大声がした。

「ココデスヨ、麻暮正作、私ハココデスヨ、ズイブント待タセルデハアリマセンカ」

その声は、妙に機械的で金属的だったが、荒野の声にまちがいないと山風は確信した。

そうして、年甲斐もなく、武者震いがおこってとめられなかった。

麻暮に促されて、山風は奥の奥へと、車椅子をおしていった。

「ソコデスヨ、ソノ扉ヲ開ケテクダサイ、花井サン、イエ山風健太サン」

たしかに突き当たりに、それこそ「豪華」というほかはない、空間全面の扉があった。

そしてそれは、なんの抵抗もなく、簡単に開けることができた。

なかは薄暗く、それでも広大なことはわかり、山風はプラネタリウムを連想した。

いかにも古道具屋から購入したとおぼしき、調度品がいくつも雑然と置かれている。

「サア、ソコニ、オ坐リクダサイ、オット、麻暮サンハ、モウ、坐ッテイルノデスネ」

急に光が射し、擲擧する声のほうをふりあおいだ山風は、口を開けたまま、しばし呆然とするしかなかった。

スカイツリーの形をした塔の先端近くに、ドラム缶ほどの大きさの、円筒の水槽が見えた。

微妙にレインボウカラーが色づいているので、水の水槽ではなく、特種な液体かもしれなかった。

その槽には「クラゲのオバケ」とでもいいモノがはいっていて、荒野の声はどうやらそのあたりからするのだった。

「山風サン、気味悪ガラナイデ、クダサイ、コレガ、私デス、荒野大三郎デス」

「まさか、いったい、どういうことなのですか」

ようやく山風が声を発し、同時に麻暮を垣間見たが、鉄仮面のなかの表情は、まったくわからなかった。

「デスカラ、コノ一休ガ、マサシク私、ナノデスヨ、半世紀前、私ノ全身ハ、麻暮サンニ、破壊サレマシタ、ケレドモ、脳死ハ、マヌガレタノデス、コノコトハ、私ニハ、川上宙衛門ニトツテモ、想定内デシタ、川上ハ、科学者トシテ、最大限ノ、能力ヲ發揮シテ、アラカジメ、私ノ脳ヲ、残ス、方法ヲ アミダシテ、イタノデスヨ、私ノ脳ハ、スクイダサレ、川上ノ薫陶ヲウケタ、木下弁太郎ニヨツテ、コウシテ、生キツヅケテ、イルノデス」

荒野の声がどこから発せられているのか、山風にはかいもく見当がつかなかったが、その声が発せられるたびに、槽の脳が微妙に動くのは見てとれた。

「僕らが見えるのですか、僕らの声がきこえるのですか」

「イイ質問デスネ、山風サン、洋館ノ内外ニ、トリツケタ、ビデオカメラガ、私ノ目デアリ、コノ部屋ノ、壁ゼンタイガ、私ノ耳デアリ、天井ニシカケタ、マイクガ、私ノ口デアリ、コレラ調度品ノ、鍵穴ガ、私ノ鼻デアルワケデス、タダ残念ナコトニ、川上ハ、生殖器ノ開発ヲ、デキズニ、死ンデシマイマシタ」

「このオバケクラゲが、永遠の生命の正体ということですか」

「イヤナ表現デスガ、ソノトオリデス」

「けれども、この塔と槽を破壊されたら、おしまいではないですか」

山風は単純な疑問を呈した。

とたんに、塔と槽が、（震度三程度だったが）振動した。

「ヨク、キイテクレマシタ、トウゼン、麻暮サンハ、イマ、ソノコトバカリヲ、カンガエテイルデショウ、ソノ車椅子ハ、当時ノステッキ以上ニ、威力ガ、アリソウデス、シカシ山風サン、御安心クダサイ、コノ塔ト槽ガ、破壊サレテモ、スペシャルDATAト、スペシャルDNAガ、アリマス、ソレガアレバ、イツデモ私ハ、再生可能、ナノデスヨ」

このとき、いままで無言だった麻暮が、独り言をつぶやきはじめる。

つぶやきではあっても、鉄仮面の裏側に響いて、じつに不気味な声調だった。

「それにしても、醜い姿だねえ。

人間のからだのなかで、脳味噌がいちばん醜いから、人目に晒されないよう、頭

蓋骨でガードしてあるんだが、そのスペシャルには、残念ながら、頭蓋骨は予定されていなかったようだねん。

まあ、そのスペシャルがどんなものかはわからんが、そういったものがあるのは折り込み済みよん、ケケケ。

むろんオバケクラゲに、管理はできんだろうから、木下弁太郎にちがいはないよん。

その木下だがね、ボクの手下の金助によって、すでに林の中で冷たくなっているのさ、もう報告が届いているからねん、ケケケ。

半世紀前の報告は、公衆電話とか電報だったが、それからポケベル、ケイタイ、スマホ、ウォッチと、死にぞこないには、便利な時代になったもんだな。

そのスペシャルとやらの、ありがをしっているのは、木下しかおるまいよん、やつが亡き者になったいま、そのスペシャルとやらも、亡き物だよん、使い物にならんスペルみたいなものさ、ケケケ。

尤も、木下も必死で抵抗したらしいから、金助のほうも、あと数分の命らしい。金ちゃん、ごくろうさん、ボクもあと数分だよん、ケケケ」

「オオ、嗚呼、オオ、嗚呼」

再び、塔と槽に激震がはしった。

(こんどは、震度5か、それとも7か、もしかすると9くらいまでいくかもしれない)

そうおもった山風は、車椅子の麻暮を庇いながら、出入り口にもどろうとした。

そのとき、麻暮の車椅子の手摺が噴射した。

車椅子は麻暮を乗せたまま宙を飛び、槽の中心に突撃した。

槽と塔が、車椅子とともに、木っ端微塵になり、「オバケクラゲ」は、雲散霧消した。

そこまで山風は目にした。

それから無我夢中で、出入り口に飛びこんだ。

山風が洋館から弾きだされて、兄の花井に受けとめられるのと、洋館が崩れおちるのが、ほぼ同時だった。

「だいじょうぶか、もんだいないか」

と花井は励ます声でいって、弟をゆさぶった。

「麻暮さんと一緒に、僕も死ぬべきだったんだ」

と山風は震える声でいって、兄にしがみついた。

暗黒の闇のなかで、漆黒の大鴉が、

「嗚呼、嗚呼」

となっていた。

